

## パルヴスの社会主義像

——第1次ロシア革命後の問題関心——

PARVUS' BILD DES SOZIALISMUS  
——EIN STUDIUM ÜBER SEIN THEORETISCHES  
INTERESSE NACH DER ERSTEN RUSSISCHEN  
REVOLUTION——

博士後期課程 政治学専攻61年入学

西 川 伸 一

NISHIKAWA SHIN'ICHI

### はじめに

20世紀初頭の社会主義思想史における、ドイツとロシアのかかわり合いを考える上で、「血の日曜日」を発端とする第1次ロシア革命が重要な意味を持つことは言うまでもない。例えば、当時のドイツの労働者大衆は、ロシアでの事件を「よりよき時代の曙光」だとして歓迎していたし、彼らを組織し指導する立場にあったドイツ社会民主党（以下 SPD）は、その機関紙『フォアヴェルツ』で、連日、革命の行方を大々的に報じていたのである<sup>1)</sup>。

歓迎と期待に満ちた SPD にあって争点となっていたのは、この隣国の革命にいかなる歴史的な位置づけを与えるかについてであった。党内左派は、革命がブルジョア的性格を帯びているにもかかわらず、プロレタリアートがその担い手であることに注目し、これを新しいタイプの革命とみなそうとしていた。その一方で、党内で多数を占める右派・中央派は、ロシアの後進性を強調し、ロシアはこの革命でようやく西欧の1848年の段階に追いつくにすぎないと考えていたのであった<sup>2)</sup>。

いずれにせよ、ドイツの多くの労働者大衆や社会主義者の期待に反して、第1次ロシア革命は敗北する。かくて、この革命は後進国の問題であり、ドイツには何ら範例にはなりえないとする右派・中央派と、革命の教訓を徹底的に学ぶ姿勢をとり、新しい革命の時代に向けて帝国主義に革命的に対決してゆこうとする左派の対立は決定的になる<sup>3)</sup>。以来、党内で孤立を強いられる左派は、党指導部ではなく急進的な党員大衆と一致していると信じることで、その勇氣と自信を見出してゆく<sup>4)</sup>。

この左派の中でも、前世紀末以降、党内で「アンファン・テリブル〔異端者〕」(G. A. リッター)として異彩を放っていたパルヴスは、最も深く第1次革命にかかわった人物として逸することができ

ない。彼は革命のクライマックスとも言える10月ゼネスト直前にロシアに潜入し、「自由の日々」の間、トロツキーとともにペテルブルク・ソヴェトの中心的指導者として活躍していたのである<sup>5)</sup>。従って、バルヴスが革命の敗北からいかなる教訓を汲み取り、どのような問題関心の転回を示したかを検討することは、20世紀初頭のドイツとロシアの社会主義の思想的交流を探るにあたって、ひとつの手がかりを与えると思われる。ドイツとロシアをまたにかけて活動したバルヴスこそ、この交流の体现者だったのだ。

本稿の目的は、前稿<sup>6)</sup>の続編として、以上のような視点を念頭に置きつつ、革命敗北から、「社会主義思想に対する彼の最後の独創的貢献」<sup>7)</sup>と評される二書『プロレタリアートの階級闘争』及び『国家、産業、社会主義』が上梓される、1910年頃までの彼の問題関心に接近することにある。その際メルクマールとなるのは、彼の社会主義像の形成である。これを軸に、ドイツとロシアの狭間に生きた「アンファン・テリブル」の視点を解明したい。

## 1. ドイツとロシア

「自由の日々」の終焉後、ソヴェトの他の同志が難境に陥ってゆく中、バルヴスも翌06年4月、逮捕され、9月にはシベリア流刑に処せられる。しかし、11月、巧妙に脱走して再びドイツの土を踏む。そこで彼はSPD同志に革命の英雄として迎えられ、自分が14カ月前とは全く異なる境遇にあることに気づくのだった。『ノイエ・ツァイト』、『フォアヴェルツ』といったSPD中央の機関誌も、バルヴスの寄稿に対して門戸を開いてゆく。SPD同志の賞讃を浴び、以前には考えられないほどの見解発表の場を与えられたバルヴスは、これ以降、きわめて充実した執筆活動を展開するのである。

この時期のバルヴスの問題関心を検討する前提として、まず彼の生涯を通じて根底にあったライトモチーフを考えてみる必要がある。それは、「ドイツとロシアという2つの要素の緊張」であった<sup>8)</sup>。彼のそれまでの半生を振り返れば、ロシア生まれのユダヤ人バルヴスはその青年期、羨望の眼差でみつめていたのは、ドイツのプロレタリアートの赫々たる闘争であった。そして1891年、パーゼル大学卒業後も帰国せず<sup>9)</sup>、シュトゥットガルトでSPDに入党、ドイツ革命を目指して活動を始める。しかし次第に彼は、SPDに蔓延する日和見主義、停滞する革命運動に行き詰まりを感じてゆき、世紀転換後は世界革命の発火点としてロシアに注目し<sup>10)</sup>、先述のように母国の革命に積極的に献身する。だが革命敗北後は、“ストリピンネクタイ”と呼ばれる反動期を迎えたロシアに対し、当のロシアの反体制派の多くも革命の時代は永久に去ったと考えたように、バルヴスがロシア革命に寄せた情熱も次第に醒めてゆくのがあった。

当時の彼の心境をかい間見ることのできる一通の手紙がある。それは、1908年2月、ケルンにいたバルヴスが、かつての盟友マルトフに書き送ったものである。その中でバルヴスは、マルトフらメンシェヴィキの機関紙『社会民主主義者の声』が、厳格に一線を画すべき合法マルクス主義と非合法社会主義との境界を取り払ってしまっていると非難し、同紙に参加することは「労働者大衆を長い間だましておくことを自らの課題」とすることだとして、寄稿を拒否している。そして、こうした傾向が

私拭されるまで自分は「観察者の役目にとどまる方を選ぶ」と述べ、ロシアの同志たちとの関係を絶っているのである<sup>11)</sup>。かくてバルヴスは、彼に対する SPD の厚遇も手伝って、SPD 党内で再びドイツ革命の問題に没頭することになる。

以上の経緯を考えあわせれば、バルヴスの生涯とは、革命の現実性を尺度として、ドイツとロシアの間を行きつ戻りつした「アンファン・テリブル」の軌跡だと言えるかもしれない。そこにはユダヤ人として生を享けた無国籍者の栄光と悲惨が凝集されていた。

このライトモチーフを基調に、革命後のバルヴスは、その教訓を来たるべきドイツ革命に生かすべく、健筆をふるってゆく。

## 2. 帝国主義論<sup>12)</sup>

「第2の祖国」ドイツに帰国後、バルヴスが最初に取りくんだのは、当時ドイツの議会での最大の関心事、植民政策をめぐる問題だった。ところで、1890年代中頃以来、植民地問題の重要性を指摘していた彼は、すでに1901年、ミュンヘンで『商業恐慌と労働組合』なる著作を刊行し、それまでの世界市場についての研究の成果を発表していた。その分析視角は、帝国主義への質的転化を遂げ始めた19世紀末の資本主義を、「個々の景気循環をこえる長期的な資本主義的波動という想定」<sup>13)</sup>から捉えたものであった。そして、世界市場の恐慌循環に帝国主義戦争を引き起こす契機を見ていたのである。その直後に起こった日露戦争は、バルヴスのこうした予測を凶らずも実証することとなった。日露戦争勃発に関する論文の中で、彼は帝国主義戦争の不可避性を例えば次のように説明している。

「資本主義体制において、社会的生産の所有者である資本家たちは、互いに他を市場から排除しようと努める。彼らのいさかいは、他の手段が使い果たされたとき、不可避に世界大戦へと向かう。」<sup>14)</sup>

1907年の帝国議会選挙敗北が直接の執筆動機とされている<sup>15)</sup>『植民政策と崩壊』(ライプチヒ、1907年)は、以上のような長年の研究を踏まえて成立した、バルヴスの帝国主義論の結実と言える労作である。同書は、帝国主義に関する「マルクス主義陣営における先駆的分析」<sup>16)</sup>と評されているし、彼の社会主義像の土台をなす社会経済理論ともみなしうるのである。そこでの彼の議論を概観しておこう。

その序文でバルヴスは、資本主義的植民政策と植民地の将来について、特に検討する必要があると述べていた<sup>17)</sup>。彼は資本主義の経済構造にとっての植民政策の意味を解明し、帝国主義の特徴の把握を目指すのだ。

バルヴスはまず、ヨーロッパ諸列強が植民地領有に血道をあげている植民政策を、全ての資本主義的工業国にみられる普遍的現象として捉え、そこに共通する一般的な原因を、資本主義的過剰生産と資本主義的競争に見出している。それによれば、一国の資本主義的発展の初期の時代には、資本蓄積はまだ小さく、矛盾はさほど鋭くない。資本は手工業的小生産を駆逐して市場を創出することに用いられるからだ。しかし資本主義的生産の成長とともに、過剰資本も増大する。そして、こうした資本主義的生産に内在する矛盾を解消するために、鉄道建設等に対する巨大な投資が行われるのだ。だ

が、これら社会資本の整備が一定水準に達すると、過剰資本は投下先を失い、恐慌が発生する。もはや過剰資本は、国内市場では処理できず、新たな投資先を、まだ資本主義的發展の初期の段階にある外国市場に求めざるをえなくなる<sup>19)</sup>。内的矛盾の外的解決である。

「植民地はそこからカネを引き出すためでなく、そこへカネをもたらすためにある。これが現代の資本主義的植民政策の核心なのだ。」<sup>19)</sup>

資本主義的發展に内在する過剰資本への傾向が、植民政策の一般的原因であった。これに加えてバルヴスは、現実に関税政策を向かわせる具体的要因として、保護関税政策を挙げている。20世紀に至るや、ドイツは工業製品にも及ぶ広範な保護関税体系を完成させ、ヨーロッパ列強や合州国も同様の政策を取っていたのであった。彼はこれら諸国が排他的な植民帝国 *Kolonialreich* を成立させる過程を、以下の如く論じる。

「資本主義的産業が暴力によって市場を拡大しようとする一方で、保護関税は市場を閉鎖せしめる。資本主義国家は相互に閉鎖し合い対立し合い、植民地へ逃げ込む。しかも同時に植民地を保護関税体系の中へ取りこもうとする。これが帝国主義である。すべての工業国は、その植民帝国を持つとし、そこからすべての他の工業国をできるだけ締め出し、あるいは駆逐しようとする。」<sup>20)</sup>

このように、バルヴスは諸列強を資本主義的植民政策に向かわせる動因として、過剰資本と保護関税政策を導き出した。さらに彼は、この政策を実際に推進する帝国主義的勢力についても分析を加えている。それはまた、植民政策を対外的特徴とする20世紀資本主義の、対内面を素描したのもであった。

バルヴスによると、今日の資本主義的發展にとって根本的な意義を持つ現象として、銀行の集中、工業の集中、工業資本の集中の3点が指摘できるという。特に彼は、カルテル、シンジケートといった形で現れる工業資本の集中に注目し、これが純粋な貨幣資本と工業資本の境界を不明確にしたとしている。銀行と企業はそれぞれ、互いに他の株式等を所有し、影響を及ぼし合うまでになっているからだ。かくて、工業カルテルと銀行連合が経済全体を支配するに至り、しかもやがて、第3の同盟者として資本主義国家が加わる。バルヴスは、これらが三位一体となって、過剰資本の投資先を植民地に求める推進力を形成するとみていた<sup>21)</sup>。これら三者が結合し、一国の経済をその掌中に収めてゆく過程については、後述の『国家、産業、社会主義』でも詳しく述べられている。

さて、各工業国のこうした帝国主義的努力が植民地獲得を目指せば、帝国主義的対立が激化するのとは必定である。そしてバルヴスは、この対立に、レーニンの規定を借りれば「資本主義の最高の段階」を、換言すれば、その最終段階の到来を認めていたのである。

「今や生産發展は、世界市場が到達した發展水準をもって、再び政治的限界と衝突している。しかし資本家階級はこの發展をもはや促進させないで、むしろそれに対立している。というのは、この時代には、資本主義的發展は、すでに資本主義的所有形態が生産發展と永久に対立するような段階に、到達しているからである。新しい發展の担い手は、プロレタリアートでのみありえる。」<sup>22)</sup>

以上のようにバルヴスは、帝国主義という資本主義的發展段階を、社会の生産發展を阻害し、生産

力と生産関係の間に永久の矛盾をもたらす段階と規定し、この段階で対立を続ける諸列強の政治的崩壊、すなわち帝国主義戦争を予示する。彼はそこから、社会主義への移行の必然性を引き出すのである。帝国主義に対するかかる把握は、日露戦争を世界戦争の前哨戦とみなし、「ヨーロッパの資本主義体制は長い前からヨーロッパの経済政治文化の発展の障害となってきた」<sup>23)</sup>とした以前のバルヴスの見解からすれば、当然の論理的帰結であったと言えよう。

### 3. 革命戦略の再構築

『植民政策と崩壊』においてバルヴスは、20世紀資本主義が有する帝国主義的特徴を捉え、諸列強の崩壊を確信した。だが、その崩壊をいかにして社会革命に結びつけるべきなのか、新たな発展の担い手とされたプロレタリアートは、いかなる課題を果たすべきなのか。バルヴスは、こうした帝国主義時代における社会変革の全体的構想の問題を、「現世代の最も重要な理論的課題」<sup>24)</sup>と位置づけていた。そして、『プロレタリアートの階級闘争』及び『国家、産業、社会主義』という相次いで刊行された二書で、この課題に答えようとする。ところで、彼はのちに、特にこの二書を取りあげて、次のように記している。

「両著作は、私が労働者代表ペテルブルク・ソヴェト及びロシア社会民主労働党の活動に参加した際に、私が従った戦術を發展させ、その戦術を体系的に論証したものである。」<sup>25)</sup>

この回想からもわかるように、この二書は、本稿が対象とする時期のバルヴスの問題関心と、それに対する第1次ロシア革命の影響を知る上で、欠かせない著作なのである。ここではまず、彼の革命戦略の転回を明らかにするために、『プロレタリアートの階級闘争』（ベルリン、1911年）の検討から始めることにする。同書は既刊の6つのパンフレットをまとめたものであり、本稿の目的にとって特に重要と思われるのは、第IV章「社会主義と社会革命」である。この章でバルヴスは、新たな情勢認識や第1次革命から得た教訓に基づいて、革命当時抱いていた革命戦略の再構築を行うことになる。

その情勢認識の特徴は、『植民政策と崩壊』での分析を踏まえて、帝国主義という資本主義の新たな段階を強く意識したことにある。例えばその序文には、第IV章を仕上げるために、「資本主義的新構造」die kapitalistischen Neubildungen を考慮することが不可欠であったと書かれている<sup>26)</sup>。そして「新構造」は世界戦争と表裏一体をなしていた。

「資本主義諸国は、互いに強力なライバルとして存在する。植民政策、帝国主義、保護関税が世界戦争を惹起しうるということは、すでに、まさに現実政策の問題となっており、全世界がこのことを考慮に入れている。」<sup>27)</sup>

だが、市場の分割・再分割をめぐる諸列強の対立だけが戦争の誘因なのではない。バルヴスは、アジア、南米、アフリカで熟しつつある新興の資本主義的国民国家が、「資本主義的世界帝国」（彼はヨーロッパ諸列強をこう呼んでいる）の帝国主義的膨張に抵抗し、これが戦争の危機を先鋭化させている点も視野に収めていた。日露戦争での日本の勝利を象徴として、早晚、ヨーロッパ産業はアジアの市場を失うだろうと彼は予想するのである<sup>28)</sup>。帝国主義諸国間の対立と新興諸国の反帝闘争—世界戦

争を「全世界が考慮に入れている」とは、このように読めるのだ。

一方、諸列強の国内に目を転じれば、「今や資本主義国家と組織されたプロレタリアートとの間の大会戦の構図」<sup>29)</sup>が浮かびあがってくる。すなわち帝国主義諸国は、対外的な戦争の危機だけでなく、国内の階級敵とも対峙することによって、腹背に敵を持つことを余儀なくされているのであった。世界市場をめぐる抗争は世界戦争に至り、資本主義的矛盾の一切を激化させる。他方、この矛盾の激化につれて国内のプロレタリアートの闘争も活発化し、国家権力はこれを武力で弾圧せざるをえなくなる。国力は浪費される。従って、内外の危機が結びつければ、資本主義に最終的崩壊が宣せられよう。「世界戦争は世界革命をもってのみ終結しうる」とパルヴスは、世界戦争と連動する世界革命を遠望している<sup>30)</sup>。

以上がパルヴスの革命構想のいわば大理論であった。そしてこの次元に関する限り、彼の構想は、第1次革命前からの「戦争と革命」という枠組を踏襲し、それを精緻化させてきているのがわかる。だが、大理論からある程度独立した機能を持ちうる中理論（革命戦略）、小理論（革命戦術）の次元では、1905年の教訓が色濃く反映されているのである。

革命前、パルヴスがプロレタリアートの主要な闘争戦術として位置づけていたのは、党と労働組合に指導された労働者の組織的行動による大衆ストライキであった。第1次革命は彼の大衆ストライキ論の試金石となった。確かにそこでは大衆ストライキは強力な闘争手段にはなったが、しかしそれはパルヴスの想定とは異なり、自然発生的に起き、組織はストの中で形成されていった。しかも結局はツァーリズムを倒せなかったのである。ここからパルヴスは、大衆ストライキについて否定的な結論を引き出すことになる<sup>31)</sup>。シベリアからドイツへ脱走してすぐに、彼が次のように述べていることも、その傍証になろう。

「特別な革命闘争手段は存在しない。革命はあらゆる政治的闘争手段を利用するのだ。……なぜなら革命は特別な闘争方法ではなくて、歴史的過程だからである。」<sup>32)</sup>

『プロレタリアートの階級闘争』においても「社会革命は今や我々の眼前で歴史的過程として発展する」と指摘しているように<sup>33)</sup>、パルヴスは“過程としての革命” die Revolution als Prozeß という新たな革命戦略を、大衆ストライキ論の代わりに提出してくる。これは革命を一点打破による権力奪取として捉えるのではなく、勝利と敗北をくり返す日常闘争のうちに闘争力を貯え、最終目標達成を目指す長期的な“弁証法的過程”<sup>34)</sup>として捉えたものだった。そしてこの革命観を裏づけていたのは、「国家内で陣地で打ち固められ、強力な防衛手段で武装された資本主義は、1度の戦いでは克服されえない」<sup>35)</sup>という、資本主義の生命力に対する醒めた認識である。パルヴスの期待に反して、第1次ロシア革命は世界革命の起点にならなかった。彼はそれが隣国ドイツにも波及せず敗北したことから、ドイツのように市民社会がしっかり国家を支えているところでは、資本主義体制は容易に倒れないことを悟ったのではなからうか。

パルヴスはこの認識の下、将来の1度の最終闘争に全てを賭けている「純粹革命主義」Der reine Revolutionismus を幻想だと論断し、最終的な闘争や（資本主義から社会主義への）最終的な発展

など存在しないことを力説する<sup>36)</sup>。

「急に資本主義を消滅させ、社会主義を生じさせる転換点は存在しない。社会革命をめぐる闘争は、すでに早くも資本主義社会自体内部に起こっている。しかしプロレタリアートは、この闘争において、幾度も押し戻されたり、制限されたりしてようやく、広範な政治的影響力 *Einfluß* を得る。そのあとで初めて、社会革命の完全な発展が始まるのだ。」<sup>37)</sup>

それゆえプロレタリアートは、広範な政治的影響力を得るために、革命を最高の要求を掲げて始めるはずで、できるだけ一般的で、幅広い階層を結集しうる要求で始めるべしとされた。彼はこの革命闘争自体が生み出す闘争力を重視し、この戦略を「革命的先鋭化ではなく闘争の社会的拡大」と位置づけている。そして、彼のかかる視点からすれば、ローザ・ルクセンブルクやカール・リープクネヒトらは、政治情勢の切迫を意識的に一挙に社会革命に直結しようとする、「革命製造主義者」*Revolutionsmacherei* だったのだ<sup>38)</sup>。ローザは第1次革命を契機に、独自の大衆ストライキ論を形成する。彼女はバルルスとは対照的に、その闘争における未組織労働者の革命的自然発生性を、積極的に評価したのである<sup>39)</sup>。一方バルルスは、革命で自らの大衆ストライキ論の限界を知り、グラムシの言うところの、短期決戦型の「機動戦」から持久力を要する「陣地戦」へ発想を転換させてゆく。

新たな革命戦略は、当然、新たな革命戦術を必要とする。すなわち、「陣地戦」を闘い抜くために、その陣容が再考されなければならなかったのである。布陣の中心に位置づけられたのは、依然として組織されたプロレタリアートであった。だがバルルスは、以前にはその政治的脆弱性を批判していた農民をも隊列に加えている。彼は、諸国の農民運動の昂揚を評価して「農民層が政治的に不活発であった時代は過ぎ去った」と述べ、農民大衆とプロレタリアートの利害のつながりが社会主義を準備するとまで言い切っている<sup>40)</sup>。「陣地戦」という闘争の長い道程を踏破するため、闘争主体の「社会的拡大」も図られることになったのだ。そして「結合された武器」*kombinierte Waffe* による闘争が、その実際の闘争方法として掲げられるのである。

「我々は、ありとあらゆる闘争手段を同時に用いることを学ばなければならない。小戦闘、各個戦闘の時代は……過ぎ去った。20世紀ではプロレタリアートは、結合された武器による最大の闘争を行うのだ。」<sup>41)</sup>

彼の説明によれば、19世紀後半以降プロレタリアートが発展させた労働組合、社会民主党、革命闘争、議会活動等々は、それぞれ依然として有効であるが、20世紀においては、なおひとつ重要なことがあるという。それは、諸闘争を個別に行うのではなく、それらを有機的にまとめあげ、ひとつの統一的闘争を展開することだった<sup>42)</sup>。バルルスは、この「結合された武器による闘争」に対する気構えを次のように述べ、第IV章を結んでいる。

「近代的闘争は、とりわけ組織的な指導、情況認識、能力力量の正確な判断、細心の注意、沈着冷静、そしてもちろんさらに最大の自己犠牲を必要とするのだ。」<sup>43)</sup>

さて、それではバルルスは、以上のような戦略・戦術の遂行によって、一体いかなる社会を建設しようとしたのだろうか。革命闘争を指導するためには、革命後の社会像を提示しておかなければなら

ない。しかし SPD はその任を果たしていなかった。党内にあった歴史的必然への確信が、この問題を等閑視し、その克服を将来に委ねていたのであった<sup>44)</sup>。だが、歴史の発展を政治闘争の産物だとみなし、そこにプロレタリアートの闘争の重要性を確認するバルヴスは、客観的発展に依拠する資本主義の自動崩壊論や、社会主義への成長仮説を拒否していた<sup>45)</sup>。それゆえ彼は、『国家、産業、社会主義』なる論文で、革命後の社会像という「未知の領域」に挑むことになる。

#### 4. 社会主義像

##### (1) 現代の社会問題

『国家、産業、社会主義』（ドレスデン、1910年）は、社会主義到来の必然性を説くくんだりから説き起こされている。

「社会主義は、すでに前から貧困と欠乏の問題から、生産発展及び文化発展のさし迫った必然性になっている。」19世紀の資本主義の飛躍的發展を経て、「今や所有制度と国家形態が社会的発展の障害物であることが明らかになっている。資本自身によって生み出された社会的諸力が、社会的諸関係の新しい秩序を命令として要求している。」<sup>46)</sup>

これが当時のバルヴスの時代認識であった。すなわち彼は、20世紀初頭の資本主義が、もはや社会発展にとって桎梏となっているとみなしていたのである。バルヴスはその現状を様々な「社会問題」の噴出を指摘することによって、例示的に明らかにしてゆく。

まずバルヴスが注目したのは、本来、社会的需要の反映であるべき生産が、自己増殖を求める資本の圧力に依存して、投機として行われている点だった<sup>47)</sup>。換言すれば、「生産は消費を生み、消費は生産を生む」という円滑な社会的連関は、その間に資本家的私的所有 *das kapitalistische Privateigentum* が介在するゆえに、破壊されてしまうのであった。ここに彼は、資本主義の基本矛盾のひとつである生産の無政府性の原因をみている。すなわち、各資本家は生産と消費の連関を意識することなく、ひたすら貨殖のために生産の拡大に突き進む。そこから過剰生産が生じるのは必至だといっているのである<sup>48)</sup>。

そこで資本家は、過剰生産のハケロを市場拡大に求めることになる。市場の拡大は消費の拡大を前提とする。だがバルヴスによれば、「[消費者でもある一引用者] 労働者を抑えつけておくことを、資本家的階級利益は必要とする」のであった。従って、生産拡大により労働者は増大し、その搾取者である資本家の富も増大するが、その一方で、搾取冷遇される労働者の購買力は伸びず、社会的消費は不活発にならざるをえない。かくて資本家たちが忘れ去っていた生産と消費の社会的連関が、恐慌という形で「最終的に無条件に自己の存在を認めさせるのだ。」このように、社会の生産が上昇するにつれて労働者が窮乏化する現象について彼は、「これは、社会的生産を資本家的鉄鎖から解放するために解かなければならない魔方陣である」とたとえている<sup>49)</sup>。

当時、この「魔方陣」は様々な「社会問題」を発生させていた。バルヴスは「魔方陣」の具体的解法を示す前に、一旦迂回して、人民大衆の窮状の告発へと向かう。彼の観察によれば、ドイツの人民



大衆は、工場や商店等での長時間労働によって疲労困憊し、文化的生活を営む時間は奪われ、その心の準備もままならない生活状態にあった。だからもし彼らに余分な収入があっても、ドイツ国民の年間30億マルク分のアルコール消費量が示すように、それは浪費されてしまうのだ。パルヴスはこの需要の奇形化を以下のように嘆く。

「これだけの額があれば、どれほど強力に文化が振興されることだろう！ この額で14歳から18歳までの全国の青少年（彼らは430万にすぎない）を養い、彼らを早くから工場や路上で墮落させる代わりに、彼らに学校教育を施すことができるのに。」<sup>50)</sup>

中産階級はどうだろう。彼らは「生活需要の制限を生活の規律にまで高めている。」すなわち、多くの必需品の購入を断念してさえ金をためこむことに汲々としているという。そして切りつめた金は銀行に預けられ、結局資本家の生産拡大の資金となる。しかしその節約分は明らかに国民の購買力の減退を意味するのだ。ここにも「生産拡大と人民需要の制限の間の資本主義的矛盾」がある。パルヴスはこの現象の底流に「貨幣崇拜」Geldkultus という資本主義社会特有の人生観の蔓延をみていた。それは「エホバの掟」にもまさと<sup>51)</sup>。

さらにパルヴスは、人民大衆の労働力が浪費されている状態を剔出する。彼いわく、労災による死者、不具者の頻出は、資本家が労働者を機械同然に扱っている証拠だ。彼らは労災防止の出費を出し惜しみ、貨殖に狂奔している。また、児童労働による弊害も深刻だ。資本家は廉価ゆえに子供を使用する。だが彼らはこれによって、「その利益を増すために、民族の青年層を破滅させる」ことになるのだ<sup>52)</sup>。パルヴスは、エンゲルスが「社会的殺人」<sup>53)</sup>と呼んだのと同じ視角で、ドイツの労働者の状態をみつめていたのである。

では、なぜこのような状態が生じているのか。パルヴスは、20世紀では人民大衆も十分豊かに暮らせる生産力が存在すると断言している。「社会的生産能力は社会的需要を上回っている」と。だが彼らが貧しいのは、「資本家的私的所有がその間に介入し、人民消費を妨げ、労働力、生産力を浪費し、文化発展を妨げている」からなのだ<sup>54)</sup>。資本蓄積のみが顧慮される資本家的利害が社会発展の妨げになっている。彼はこれに社会主義的利害を対置し、社会発展の道を切り拓こうとする。社会主義の概念は、こう規定された。

「社会主義は、単なる社会理念、政治勢力であるだけでなく、それは資本主義世界から上昇してきて、資本主義的發展が社会的生産の発展と人間文化の進歩を抑止するがゆえに資本主義世界と衝突するに至る新世界である。」<sup>55)</sup>

そして彼は、社会主義的経済政策の指針を、6段階にして示すのである。それは、マルクスの表現になぞらえれば、「疎外された労働」が、人間の本質の対象化である労働本来の姿を取り戻すための処方箋でもあった。

1. 社会的需要の発展—豊かな生活への欲求を呼びさます。
2. 社会的需要の組織—需要と生産との調和が図られる。
3. 社会的労働力の保護育成—青年は学校に属し、労働者は機械の主人となり、労働は健康と活力

を与える。

4. 社会的生産の発展。
5. 社会的生産の組織—労働は労苦から喜びになる。
6. 労働の解放及び貧困の圧迫からの労働者の解放—労働は呪いから祝福になる<sup>56)</sup>。

## (2) 20世紀資本主義と銀行

「社会問題」の考察から、20世紀資本主義の腐朽性は明らかだった。しかしこのことは、その一方で、古い社会の胎内で孵化された生産力が、新たな生産関係を準備している証左でもあった。パルヴスはこの点を、「資本主義的活動の中心には、現在、銀行がある」<sup>57)</sup>という認識に依って論証する。彼は、銀行が国家の経済的中枢を占めるに至る過程を辿り、そこに20世紀資本主義の特徴を看取している。

すなわち、資本主義的競争の昂進は、ますます社会の富を偏在化させてゆく。人民大衆の窮乏化とは対照的に、自然淘汰されて残った大資本家は、その使途が見あたらないほど、資本蓄積を増大させるのだ。そこで彼らは、「銀行にその資本を供給し、利息を要求する」ことに、余剰資本の使途を見出す<sup>58)</sup>。これに伴って、証券銀行、投資銀行として出発したドイツの銀行は、次第に預金銀行の性格を備えることになった。パルヴスは、この銀行業務の変化の画期を、90年代にみている<sup>59)</sup>。

かくて銀行の預金高は急増し、「大銀行は利子を作り出すという問題に直面する。」それゆえ銀行は、国家に対する金貸し業務という自衛策を講じることになる。当時、国家は、常備軍の増強、戦費の調達、鉄道建設などで、莫大な資金を必要としていたのである。国家はそれを銀行に頼らざるをえなかった。銀行はやがて、「国債によって銀行は富む。……国債が発行されなくて困るのは……国家ではなく……むしろ銀行なのだ」と指摘できるように、戦時公債、鉄道債等の国家信用の取り引きで、安定した業績をあげ、成長を遂げた<sup>60)</sup>。

国家だけでなく、鉄工業、艦装業、造船業、電気産業、建築業なども、その成長とともに銀行の資金援助を不可欠としてゆく。パルヴスによれば、大規模な経営形態をとるに至ったこれら産業は、その事業の維持拡大に、自己資本をはるかに越える資力を必要とするからであった。大規模産業は銀行の影響下に入るのだ。そのうちに銀行は、債権者として各産業の株主総会にその監査役 Aufsichtsrat を送りこみ、各産業の運命に関心を抱くまでになる。こうして「銀行の統帥権」が確立する。ここでは、銀行の活動が事業発展の決定的な要因となり、事業の効率的運営という銀行の視点から、関連事業間の結合 Kombination が断行される。それゆえ個々の事業家は、「単なる株主として協へ押しやられてしまう」のだ<sup>61)</sup>。

おおよそ以上のように、パルヴスは銀行資本が産業支配を確立する過程を跡づけていた。そして今や、巨大な銀行コンツェルンが成立していると、彼は言うのである。

「産業は銀行によって集中化される。銀行資本は大銀行へと集められる。こうした集中は同時に地域的な集中でもある。その結果ドイツでは、ベルリンが大銀行の居城として、あらゆる産業の先頭に

現れる。」<sup>62)</sup>

バルヴスは、この事態の進展をリーサー J. Riesser の研究に拠りつつ、ドイツの4大銀行集団(ドイツ銀行、ディスコント・ゲゼルシャフト、ドレスデン銀行=シャフハウゼン銀行、ダルムシュタット銀行)を例にとり、論じている。これら大銀行は、地方の中小銀行を吸収合併してゆくとともに、地方銀行が関連した諸事業をも集約化してゆく。かくして4大銀行のそれぞれは、産業のカルテル化、シンジケート化を推し進め、大銀行と大産業が協力して経済全体を支配するに至る<sup>63)</sup>、と。

この現象は、一大経済システムの成立として捉えられた。バルヴスによると、そのシステムとは、相互の株式所有や監査役参加などで密接に結びついた大銀行、巨大産業、醸装業が頂点をなし、これが、その下に「大木の根の成長」のようにして連なる中小の銀行、産業を支配するという、ピラミッド状の構造をなすものだった。「関連事業を擁する4大銀行の各々は、そうしたシステムとして把握される」と彼は説明する<sup>64)</sup>。

ここで重要なのは、バルヴスがこのシステムの成立過程を「有機的過程」とみなし、これを指標として、「野蛮な競争」が支配する19世紀資本主義とは異質な20世紀資本主義を、「組織の法則」と特徴づけている点である。例えば、20世紀においては、カルテルの価格協定にみられるように、競争を回避する傾向が一般的になる。また、19世紀の自由競争期には主役だった各資本家は、資金を提供して利息を得る金利生活者と化するが、その一方で、大銀行と大産業は結合して、「資本家王朝」*kapitalistische Dynastien* を形成する、等々<sup>65)</sup>。そのことを物語るものとして、バルヴスは「互いに顔見知りの300人が大陸の経済の運命を左右している」という、ドイツの実業家ラーテナウ W. Rathenau の言葉を引用している。そして彼はこの言葉を、「当然、労働者階級にも知らしむべきだ」と述べるのである<sup>66)</sup>。問題は300人の“横領者”と呼ばれる少数の資本家集団の存在だった。バルヴスは彼らに、『資本論』の次の一節を投げかける。

「前には少数の横領者による民衆の収奪が行なわれたのであるが、今度は民衆による少数の横領者の収奪が行なわれるのである。」<sup>67)</sup>

上述の検討から、バルヴスは、ヒルファーディングがのちに“組織された資本主義”と形容した20世紀資本主義の特徴を、先取りして把握していたと言えまいか。すなわち彼は、銀行資本と産業資本の緊密化の進行により、きわめて少数の金融資本家集団の寡頭制的経済支配が確立したこと、さらに、その経済システムが、19世紀的な生産の無政府性を解消するような、競争回避的構造を備えていたことを、見抜いていたのだった。いわばこの“組織された資本主義”の形成過程を跡づけたバルヴスは、その成立をもって、資本主義が最高段階に達し、少数の資本家集団による経済支配という問題をのぞいて、社会主義の前提条件が整えられたと認識するのである。

### (3) 社会主義への展望

かくて、20世紀資本主義が育んだ生産力によって、社会革命の機は熟していた。バルヴスは、革命後の社会における社会主義的改造という課題に、その関心を移してゆく。とりわけ彼が社会主義への

出発点とみなしていたのは、銀行の国有化であった。すなわち、経済領域ですでに支配的地位を占めている銀行を、革命を経て人民の政治組織となる国家の所有にすることで、社会主義の前段階を構築できるとしたのである。大銀行と大産業が結合して資本家的寡頭制を形成し、その傘下に他の銀行、産業を収めるという20世紀的情况を考えれば、銀行の国有化は国家にとって、基幹産業をはじめとする全産業部門を、自らの支配下に置くことを意味していた。加うるに彼は、郵便、電信、鉄道、電気、ガスなどの事業で、国家や自治体が独自に生産の領域にかかわっている現実注目し、国家、自治体のこれら経済圏 *Wirtschaftskreis* と、銀行によって統合された産業を結びつけて、強力な経済システムを創出することを提唱する<sup>69)</sup>。これが社会主義への柱石をなすとされた。

具体的には、この経済システムは、重要な産業部門、流通手段の包括的統合を目指したものであった。つまりこれが、技術の完全化、生産の規則化、販売の組織化を成し遂げれば、大幅な節約を期待できるというのだ。パルヴスは、生産統合の利点を専門家の証言に従って、以下の6点に要約している。1) 生産過程の短縮。2) 大量生産。3) エネルギーの完全利用。4) より一層の操業の継続。5) 総経費の節約。6) 不要な輸送の回避。それまで、国家—政治的観点、自治体—行政的観点、産業—私有財産的観点として別々に理解されてきた三分野を統合する経済的效果は、これら諸点から明白になったのである<sup>69)</sup>。パルヴスは『プロレタリアートの階級闘争』の中で、革命の目的を生産の社会化と規定していた<sup>70)</sup>。そして、彼が構想する経済システムは、この目的にかなうものだった。すなわち彼は、革命後の社会において、この経済システムを、産業を吸収し生産を完全に社会化するまで発展する存在と位置づけていたのだ<sup>71)</sup>。

しかしパルヴスは、これだけで社会主義を実現できるとしたわけではない。以上の言及は、いわば社会主義的下部構造に関するものであり、これに対応する社会主義的上部構造の問題、すなわち社会主義国家についての検討が残されていた。

「実際は、国有化によって資本家的支配の形態が変わるのであって、その支配そのものが変わるのではない。我々は国家権力の下に生産を集中させることを—いづれにせよある程度までは—必要とする。しかし我々はまた、我々が国家権力に対置しうる力量をも必要とする。」<sup>72)</sup>

パルヴスが最も危惧していたのは、社会主義国家の強権化であった。つまり、彼の構想では、本来、死滅しつつあるはずの社会主義国家は、国有化によって、さらに大きな権限が授けられることになる。彼はここに、国家的な経済集中の利点のみならず、プロレタリアートの道具であるはずの国家が肥大化し、その権力が濫用されるおそれを感じ取っていた。そこでパルヴスは、国家に対して人民の諸権利を守り、国家を効果的に統制する保証 *Garantien* が必要だと説く。次のように、それはまず国家自身の組織にあるとされた。1) 議会。2) 議院内閣制。3) 普通、直接、平等、秘密選挙による議会選出。4) 直接選挙による官吏任免。5) 民兵。6) 政治的自由。7) 義務教育。8) 8時間労働制<sup>73)</sup>。

これらは、徹底した民主主義の諸要求であった。だが、このような完成された民主主義ではないにせよ、スイス、合州国、フランス、イギリスといった先進民主主義国の事例に照らせば、民主主義だ

けでは、人民の意思を“国家の論理”に抗して貫きえないことは、明らかだった。それゆえ「もっと進んだ保証を捜さなければならない。」<sup>74)</sup>バルヴスはこの保証を“都市の論理”の中に見出す。

それによると、中世において小さな共和国として独立を誇った都市自治体も、中央集権的政府と中央集権的軍隊をもつ近代国家の成立以降は、単なる行政機関であった。しかし、前世紀後半から今世紀にかけての産業発展は、都市予算の膨大化にみられるように、大都市の行政活動を飛躍的に高める結果をもたらした。衛生、交通、教育、文化など多くの人々の共同生活から生じる公益を代表する都市自治体の復調は疑いようもなく、都市と国家は競合関係に至るまでになっている、という。

「それゆえ都市自治体の発達は、資本主義社会においてすら、資本主義的国家政策、すなわち帝国主義に抗する対立物を形成する。植民政策に対して自治体政策！自治体としての都市は消費共同体である。消費者の経済的利害は従って、資本家階級の政治的利害と対立する。」<sup>75)</sup>

すなわちバルヴスは、都市自治体を、独立的な権力核として国家権力中枢を取り囲み、“都市の論理”によって“国家の論理”に対抗しうる拠点と捉えていた。そして、自治体政策をテコにした新たな国家理念が、社会主義的国家理念として提出されるのである。それは、階級国家に対立する、生産＝消費共同体としての国家理念であった<sup>76)</sup>。かくて、生産と消費の社会的連関は回復され、自ら「魔方陣」と呼んだ富の偏在は、解消されるはずだった。バルヴスはさらに、この国家理念の担い手を、具体的に論じてゆく。彼はそれを、生産、消費両部門での大衆組織の問題だと考えていた。

消費部門では、大衆の消費力を組織する消費組合を挙げている。強力な経済システムに対して消費者個々の権利を保護するためには、人民大衆も購買力を統合し、大衆需要として貫徹させる必要があるとされたのだ。いわば需要の人民管理であった。一方、生産部門では、労働組合が重要な役割を担うという。バルヴスは、ここを足場に、資本主義的搾取の遺制を一掃し、労働者の状態における職種上、地域上の相違をなくすことを目指していた。この過程は長期に及ぶため、労働組合は革命後もなお長く、国家や自治体に対して労働者の利益を代表してゆかなければならないと彼は主張する。その他にも、「大規模な社会経済システム内の基礎細胞として」協同組合等の多様な組合組織が、社会革命の遂行には欠かせない要素だとした<sup>77)</sup>。

「国家の民主化と自治体の自律だけでは、我々にとって十分ではない。我々は、労働者組織自体を、労働組合、社会民主党、諸団体を、新たな国家形成の欠くことのできない部分とみなす。」<sup>78)</sup>

バルヴスは、革命後の社会像として、肥大化が予想される社会主義国家に大衆が抵抗しうる立脚点を多く備えた、多元的な柔構造をもつ社会を描き、その構造に「国家の集中権力に対置しうる力量」を期待したのであった。このことは、次のように評されている。

「注目に値するのは、バルヴスがこの年に、全能の社会主義国家に対して彼が理論的留保を示すことで、民主的な社会主義理論ではまだ明確に認識されず、1917年によく、ロシアの少数派の独裁によって明らかになった政治的危険に立ち向かったことである。」<sup>79)</sup>

## むすびにかえて

バルヴスの社会主義像を要約すれば、以下のようになろう。彼にとって第1次ロシア革命の敗北は、単にツァーリズムを打倒できなかつたというばかりでなく、この隣国の革命的昂揚を西欧革命の発火点にしえなかつたという点で、二重の敗北を意味した。この敗北からバルヴスは、レーニンが「世界の反動」とたとえたほどの、一撃では倒れえぬツァーリズムの堅牢さと、グラムシの表現を用いれば、市民的コンセンサスという「要塞と砲台」に支えられたドイツ資本主義のゆるぎない生命力を痛感したのである。そこで彼は、新たな認識に対応する理論の構築を模索してゆく。

その立論は、20世紀資本主義の分析を土台とした。バルヴスの炯眼は、対外的には植民地獲得に明け暮れる帝国主義であり、対内的には大銀行と大産業の結合を頂点とした“組織された資本主義”という、20世紀資本主義の実相を捉えていた。こうした分析を踏まえて、彼の関心は革命論の再構築へと向かう。そこでは、世界戦争＝世界革命を大前提として、“過程としての革命”という「陣地戦」が考えられた。そして、さらにバルヴスは、革命後の未来診断＝社会主義像へと関心を高めてゆく。それは、革命前の研究を受け継いだ資本主義分析と、革命で大きな修正を余儀なくされた革命論の結合だった。すなわち、銀行の国有化を社会主義の前段階としたように、現存のものを粉砕するのではなく、既存の生産力を社会主義建設に役立てる長期的展望が示されたのである。

しかし、このようなバルヴスの思想的営為も、「バルヴスはあきらかにすっかり狂ってしまいました」<sup>80)</sup>というローザの言葉に象徴されるように、SPD左派内ですら、誰からも理解されなかつたと言ってよい。だが彼らがバルヴスを理解できなかつたのは、彼の「狂気」のゆえではなく、その卓抜した先見性のゆえだったと思われる。例えば、彼の帝国主義論は、第2インターの帝国主義論のひとつの主要な理論的潮流を形成するとみなされているし、また、彼の漸進革命の構想は、グラムシの「陣地戦」への戦略転換を想起させるものであった。そして、彼の社会主義国家の肥大化を憂慮する見解は、ロシア革命の推移や既存社会主義国家の現状に照らせば、きわめて示唆的である。さらに、次の言葉を引こう。

「マルクスが活動したのは自由競争の資本主義期であった。その時代に有効であったテーゼが永久不変であると信じるのはマルクス主義の否定にはかならない。」<sup>81)</sup>

この老マルキストの言葉を聞くと、ヒルファーディングを思わせる20世紀資本主義論を基礎に、新たな革命論、社会主義像を展開したバルヴスは、マルクス主義を「教条ではなく行動の手引き」(レーニン)として理解した革命家の1人だったという気がしてならない。「異端の視点」は、読み直されてよい。

### 注

- 1) Peter Lösche, *Der Bolschewismus im Urteil der deutschen Sozialdemokratie 1903-1920* (Berlin, 1967), S. 35.
- 2) Ebenda, S. 38-39.
- 3) 三宅立「第1次ロシア革命とドイツ」『歴史学研究』324号(1967年)64頁。

- 4) シュタインベルク、時永、堀川訳『社会主義とドイツ社会民主党』（御茶の水書房、1983年）38-39頁。
- 5) パルヴスの生涯については、ゼーマン、シャルラウ、蔵田、門倉訳『革命の商人』（風媒社、1971年）を参照されたい。
- 6) 拙稿「第1次ロシア革命におけるパルヴス、トロツキー、レーニン」『明治大学大学院紀要』第24集-3（1986年）。
- 7) ゼーマン、シャルラウ、前掲書、126頁。
- 8) Heinz Schurer, "Alexander Helphand-Parvus-Russian Revolutionary and German Patriot," *The Russian Review*, vol. 18, No 4 (1959), p. 314.
- 9) パルヴスは後年、この時の心境を次のように述懐している。「私は社会主義者になったために、私の目の前で起こっている闘争について関知せぬ傍観者のままでいることはできなかった。」Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit* (Berlin, 1918), S. 7.
- 10) 「血の日曜日」の直前、彼は次のような見解に達していた。「ロシアのプロレタリアートの政治闘争に従うことによって、我々は国際社会主義の世界的展望へと導かれよう。」Parvus, "Война и революция V. Самодержавие и реформы," *Искра*, No. 82, 1-го января 1905г.
- 11) *Социал-демократическое движение в России*, т. 1, под ред. А. Н. Потресова и Б. И. Николаевского (Москва, 1928), стр. 179.
- 12) これについて、詳細には次の論稿を参照されたい。山口和男「パルヴスと帝国主義」『思想』568号（1971年）、河西勝「パルヴスと帝国主義 —『植民政策と崩壊』を中心に—」『経済学研究』（北大）第21巻第4号（1972年）、田中良明「パルヴスの帝国主義認識」『経済学雑誌』（大阪市立大学）第72巻第1号（1975年）。
- 13) 田中良明「ドイツ社会民主党左派の帝国主義認識の前提」『経済学雑誌』第68巻第4号（1973年）38頁。
- 14) Парvus, "Война и революция I. Капитализм и война", *Искра*, No. 59, 10-го февраля 1904г.
- 15) SPD は植民政策を争点としたこの選挙で、得票数こそ伸ばしたものの、38議席を失うという惨敗を喫する。パルヴスは、「選挙闘争を批判的に解明し、選挙の政治的帰結および帝国議会の新しい構成を引き出す」ために同書を執筆する。Parvus, *Die Kolonialpolitik und der Zusammenbruch* (Leipzig, 1907), Vorwort.
- 16) 河西、前掲論文、163頁。
- 17) Parvus, a. a. O.
- 18) Ebenda, S. 11-12.
- 19) Ebenda, S. 15.
- 20) Ebenda, S. 17.
- 21) Ebenda, S. 105.
- 22) Ebenda, S. 97.
- 23) Парvus, "Война и революция V. Самодержавие и реформы," *Искра*, No. 82.
- 24) Parvus, *Der Klassenkampf des Proletariats* (Berlin, 1911), S. 4. 以下 *Klassenkampf* と略。
- 25) Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit*, S. 66.
- 26) Parvus, *Klassenkampf*, S. 3.
- 27) Ebenda, S. 119.
- 28) Ebenda, S. 146.
- 29) Ebenda, S. 144.
- 30) Ebenda, S. 147.
- 31) 田中良明「パルヴスの大衆ストライキ論」『法経論集 経済・経営篇 I』（愛知大学）113号（1987年）256-257頁。
- 32) Parvus, "Die russische Revolution," *Leipziger Volkszeitung*, Nr. 263, den 13. November 1906.
- 33) Parvus, *Klassenkampf*, S. 135.
- 34) Winfried B. Scharlau, *Parvus-Helphand als Theoretiker in der deutschen Sozialdemokratie und seine*

*Rolle in der ersten russischen Revolution (1867-1910)*, Phil. Diss., Münster/Westf., 1960, S. 266.

- 35) Parvus, a. a. O., S. 149.
- 36) Ebenda, S. 136-137.
- 37) Ebenda, S. 138.
- 38) Ebenda, S. 145.
- 39) 田中、前掲「バルヴスの大衆ストライキ論」257頁。
- 40) Parvus, a. a. O., S. 130.
- 41) Ebenda, S. 109.
- 42) Ebenda, S. 109, 138.
- 43) Ebenda, S. 149.
- 44) Scharlau, a. a. O., S. 269.
- 45) Parvus, a. a. O., S. 121.
- 46) Parvus, *Der Staat, die Industrie und der Sozialismus* (Dresden, 1910), S. 1. 以下 *Der Staat* と略。
- 47) Ebenda, S. 2.
- 48) Ebenda, S. 4-8, 14.
- 49) Ebenda, S. 10, 14-15.
- 50) Ebenda, S. 18-19.
- 51) Ebenda, S. 19-20.
- 52) Ebenda, S. 21.
- 53) エンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」『マルクス＝エンゲルス全集』（大月書店）第2巻、326頁。
- 54) Parvus, a. a. O., S. 22.
- 55) Ebenda, S. 25. S. 158 にも同様の記述あり。
- 56) Ebenda, S. 25-26.
- 57) Ebenda, S. 41. バルヴスは、すでに1907年選挙に、社会改革の綱領として選挙綱領を掲げ、その中に銀行の国有化を含めていた。Parvus, *Die Kolonialpolitik und der Zusammenbruch*, S. 39-41.
- 58) Parvus, *Der Staat*, S. 42.
- 59) Ebenda, S. 55.
- 60) Ebenda, S. 43-45, 49-50.
- 61) Ebenda, S. 58-69.
- 62) Ebenda, S. 72.
- 63) Ebenda, S. 74.
- 64) Ebenda, S. 77-78.
- 65) Ebenda, S. 81-86.
- 66) Ebenda, S. 92.
- 67) Ebenda, S. 98. 訳文は『マルクス＝エンゲルス全集』第23巻第1分冊、995頁に拠った。
- 68) Parvus, a. a. O., S. 112-114.
- 69) Ebenda, S. 117-133.
- 70) Parvus, *Klassenkampf*, S. 131.
- 71) Parvus, *Der Staat*, S. 135.
- 72) Ebenda, S. 143.
- 73) Ebenda, S. 144-145.
- 74) Ebenda, S. 145.
- 75) Ebenda, S. 145-148.



- 76) Ebenda, S. 149.
- 77) Ebenda, S. 150-156.
- 78) Ebenda, S. 163.
- 79) Scharlau, a. a. O., S. 276.
- 80) ローザ・ルクセンブルク、阪東宏訳『ヨギヘスへの手紙』第4巻（河出書房新社、1977年）142頁。
- 81) 石堂清倫『異端の視点』（勁草書房、1987年）370頁。